

大学生の読解ストラテジーに対する認識と読解能力との関係について

橋口 美紀*

Awareness of Reading Strategies and Reading Proficiency in EFL

Miki HASHIGUCHI

Abstract

Reading strategies have often been shown to have a positive effect on a reader's comprehension in a second/foreign language. The present study investigates the relationship between college students' awareness of their reading strategies and their reading proficiency in English as a foreign language. Two groups of students participated in the study. Group One consisted of 154 native speakers of Japanese, all first-year college students. Group Two consisted of forty-three native speakers of Japanese taking English , a second-year basic English class. For data collection, two kinds of instruments were used: a questionnaire on reading strategies and an English reading proficiency test. The results indicated that more proficient readers were more aware of "global" or top-down type of reading strategies. Less proficient readers tended to be stuck in more "local" or bottom-up in their views of reading strategies. This relationship between awareness of reading strategies and EFL reading proficiency was found in both the freshman and sophomore groups.

KEY WORDS: *reading strategy, reading proficiency, global type of strategies, local type of strategies, EFL*

1. はしがき

読解における読み手のストラテジーは、読み手が書かれたテキストとどうかかわっているかを明らかにし、またテキストの理解と関係しているもので、近年注目を浴びてきている。Rumelhart (1977) らは、ESL (English as a Second Language 第二言語としての英語) の読解で見られる、ボトムアップストラテジーとトップダウンストラテジー両者間の複雑なインターアクションについて説明した。Carrell and Eisterhold (1988) は、テキストの理解とは、読み手の背景知識とテキスト間の相互的なプロセスであると説く一つの読解モデル

を提案した。この読解の相互的なプロセスにおいては、読み手のストラテジーの使用が大変重要となってくる。ここでの「ストラテジー」という言葉は、読み手のテキストに対する積極的なかわりを意味している。Barnett (1988) は、読解ストラテジーの効果調べ、外国語としての仏語の読解における、読み手のストラテジーに対する認識と読解能力との関係を示した。Carrell (1989) は、第一言語と第二言語において、読解ストラテジーに対する認識と読解能力との関係を調べた。天満 (1992) は EFL (English as a Foreign Language 外国語としての英語) において、読み手のさまざまなストラテジーの認識と読解能力との関係を調べた。

* : 外国語教育センター

本研究は、日本での EFL の読解における大学生のストラテジーの認識と読解能力との関係を調べ、天満 (1992) の追調査を行なうものである。調査の枠組みは天満にしたがったが、以下三つにおいて異なっている。まず、天満の調査では、被験者は都内および近県の私立大学4校に在籍する学生で専攻もさまざまであったが、本研究では体育専攻に限られ、地方の一国立大学の学生である。次に、天満においては読解能力を調べるのに、研究者自身が作成したテストによったが、本研究では G-TELP (General Tests of English Language Proficiency) と実用英語検定試験を読解テストとして使用した。また、1年生と2年生の二つの学年の比較も行なうこととした。

本研究の調査目的は以下の三つを調べることにある。

- 1) 外国語としての英語の読解において、学生の読解ストラテジーに対する認識と読解能力との間になんらかの関係が見られるか。
- 2) 読解ストラテジーに関して、読解に優れた学生と未熟な学生で、なんらかの違いがあるか。
- 3) 1年生と2年生で、読解ストラテジーに対する認識に何か違いがあるか。

2. 実験方法

2.1. 被験者

鹿屋体育大学に在籍する1年生154名、筆者が担当する「英語」を受講する2年生43名の計197名を対象とした。体育学部の学生で、専攻は体育・スポーツ課程と武道課程に分かれているが、英語の習熟度はさまざまな学生で構成されており、偏りのない構成と考えてよいと思われる。

2.2. 調査資料

調査に用いた資料は、質問紙(資料1)と英語の読解能力を調べるための選択式テスト(資料2, 3)の2つである。

質問紙は、黙読における読解のストラテジーを読み手がどう認識しているかを客観的に引き出すことを目的としたもので、天満(1992)の追調査を目的としたため、質問項目36項目等すべてその

まま参照した。但し、英語を外国語として学ぶ日本人被験者に提示するため、天満(1992)同様、Carrell(1989)の質問項目および指示文はすべて日本語に翻訳した。

読解能力測定に使用したテストは、1年生と2年生で異なる。1年生は、年度始めにプレースメントテストとして全員にG-TELP4級を受験させ、その読解セクションの結果を利用した。また、2年生には、平成12年度に実施された実用英語検定試験2級の問題から、3つの説明文と問題を抜粋して読解テストとした。異なったテストを使用したのは、2年生グループが1年生グループより大学入学後1年余計に英語を学習していたからである。なお、G-TELP4級は実用英語検定試験3級レベルと同等と考えられている。

2.3. 手順

1年生グループには全員、年度始めの4月、正規の授業が始まる前にプレースメントテストとしてG-TELPを受験させた。時間は65分(文法20分、聴解15分、読解および語彙30分)で、学生は各セクションを制限時間で終えなければならない。試験直後、英語の読解ストラテジーに関する質問紙への回答を求めた。偶然にも、G-TELPの最後のセクションが読解だったため、学生は受験したばかりの読解問題を振り返りながら、質問項目に回答できたと思われる。2年生グループは、英語検定2級問題から抜粋した読解試験を30分で終え、その後質問紙に回答させた。

2.4. データ分析

2つのグループの読解テストの平均値と標準偏差を示したものが、表1である。1年生グループは、平均値=51.9点、標準偏差=18.8となった。この結果に基づき、71点以上の学生を上位1グループ、33点以下の学生を下位1グループとし、すぐれた読み手と未熟な読み手にグループ分けした。2年生グループは、30点満点で平均値=13.3点、標準偏差=5.5となった。その結果、18点以上の学生を上位2グループ、8点以下の学生を下位2グループとした。

表1：1年生グループ，2年生グループの読解テスト結果

1年生グループ (N=154)		2年生グループ (N=43)	
G-TELP 4級		実用英語検定 2級	
M=51.9 (100点満点) SD=18.8		M=13.3 (30満点) SD=5.5	
上位1グループ (N=28)	71	上位2グループ (N=12)	18
下位1グループ (N=24)	33	下位2グループ (N=9)	8

読解ストラテジーに関する質問紙のデータは、これら4つのグループ（1年生の上位1，下位1グループ，2年生の上位2，下位2グループ）から集めた。質問紙に関しては、読解ストラテジーに関する20項目について、「全く賛成」の回答に5点、「全く反対」に1点を与えた。この20項目

は、天満（1992）が因子分析にかけ、統計的に有効であると分析されたものである。これら20項目は大きく5つの因子に分類される（表2）が、これも天満の分類に従った。1年生，2年生それぞれの上位（すぐれた読み手）グループ，下位（未熟な読み手）グループの質問紙のこれら20項目に対する回答の平均値を比較することにより、すぐれた読み手と未熟な読み手の持つストラテジーに対する認識の違いをみていきたい。

3．結果

読解ストラテジーの5つの因子は、肯定的なものとする否定的なものに分かれている（表3）が、ここでの「肯定的」とは「読解に役立つものとして肯定的にストラテジーを認識しているもの」で、「否定的」とは逆に「読解に支障をきたすものと

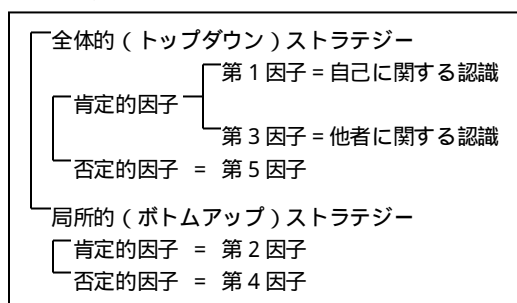
表2：読解ストラテジーの五つの因子の有効項目

<p>第1因子：英語を読む際に、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 文章中次に何が来るかを予測できる 2) 主要部分とそれを支える詳細部分との違いを認識できる。 3) 文章中にすでに存在する情報と次に来る情報とを関係づけられる 4) 著者の言っていることの重要性や真実性を問うことができる。 5) 読んでいる文章の内容を理解するために、既知の知識や経験を利用できる。 6) ある事柄が理解できているかいないかをきちんと認識できる。 <p>第2因子：英語を読む際に、何かわからないことがある場合には、</p> <ol style="list-style-type: none"> 10) 知らない単語を辞書で調べる。 <p>英語を読む際に、効果的に読むために気をつける事柄は、</p> <ol style="list-style-type: none"> 13) それぞれの単語の意味を理解すること。 18) 単語を辞書で引くこと。 <p>第3因子：自分の知っている人物の中で、英語を最も上手に読む人物は</p> <ol style="list-style-type: none"> 31) 文章全体の意味をつかむことに優れている。 33) 単語の意味を推測することに優れている。 34) 文章中の情報と自分がすでに知っていることとを統合することに優れている。 36) 文章の構成を把握することに優れている <p>第4因子：英語を読む際に、読解を難しくする原因は、</p> <ol style="list-style-type: none"> 21) 個々の単語の音。 22) 単語の発音。 25) アルファベット。 <p>英語を読む際に、効果的に読むために気をつける事柄は</p> <ol style="list-style-type: none"> 15) それぞれの単語全体の発音が完全にできること。 <p>第5因子：英語を読む際に、読解を難しくする原因は、</p> <ol style="list-style-type: none"> 26) その話題について自分がすでに知っていることに文章を結びつけること。 27) 文章全体の意味をつかむこと。 28) 文章の構成。

（『学習者中心の英語読解指導』より抜粋）

して否定的認識をしているもの」である。

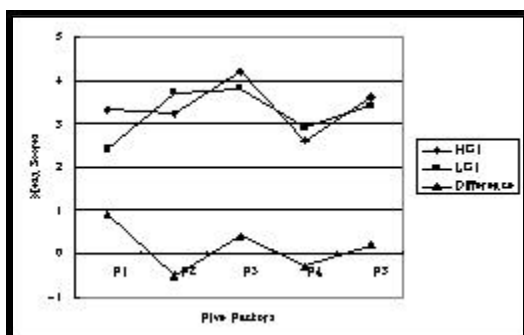
表3：読解のストラテジーに内在する五つの因子



(『学習者中心の英語読解指導』より抜粋)

1年生グループの5つの因子の読解ストラテジーの平均点は、次の図表1に示す通りである。

図表1：1年生グループの五因子に対する平均値と上位下位間の差



	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
上位1	3.3	3.2	4.2	2.6	3.6
下位1	2.4	3.7	3.8	2.9	3.4
差	0.9	-0.5	0.4	-0.3	0.2

第1因子(全体的ストラテジー使用に関して肯定的)に対する上位1グループ, 下位1グループの平均点の差は, 0.9であった。第1因子の項目のうち最も差が開いたのは, 「英語を読む時, 主要部分とそれを支える詳細部分との違いを認識できる」(1.25)であった。よりすぐれた読み手は, 第1因子の項目に賛成する傾向にあった。

第2因子(局所的ストラテジー使用に関して肯定的)の上位, 下位グループの差は, -0.5であった。第1因子の結果と違い, 下位1グループの平均点が, 上位1グループの平均点を上回った。上位, 下位で最も差が開いたのは, 「英語を読む際

に, 効果的に読むために気をつけるのは, それぞれの単語の意味を理解すること」(-1.04)である。

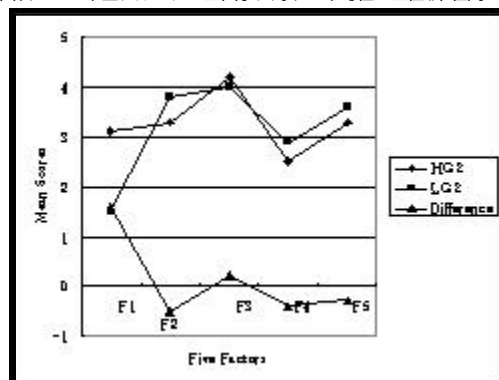
第3因子(他者の全体的ストラテジー使用に関して肯定的)の二グループの差は, 0.4であった。最も差が開いた項目は, 「自分の知っている人物の中で, 英語を最も上手に読む人は, 単語の意味を推測することに優れている」(0.65)である。

第4因子(局所的ストラテジー使用に関して否定的)の差は, -0.3であった。第2因子同様, 下位1グループの平均点が上位1グループより高かった。最も差が開いたのは, 「英語を読む際に, 読解を難しくする原因は, アルファベット」(-0.53)であった。

第5因子(全体的ストラテジー使用に関して否定的)の差は, 0.2で五つの因子の中で最も開きが小さかった。第5因子の中で差が開いたのは, 「英語を読む際に, 読解を難しくする原因は文章全体の意味を推むこと」(0.3)であった。

2年生グループの5つの因子の読解ストラテジーの平均点は, 図表2に示す通りである。

図表2：2年生グループの五因子に対する平均値と上位下位間の差



	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
上位2	3.1	3.3	4.2	2.5	3.3
下位2	1.5	3.8	4.0	2.9	3.6
差	1.6	-0.5	0.2	-0.4	-0.3

2年生グループでは, 第1因子に対する上位, 下位グループの平均点の差が最大で, 1.6であった。項目では, 「英語を読む際に, 読んでいる文章の内容を理解するために, 既知の知識や経験を

利用できる」で最も差が開いた。

第2因子の上位、下位グループの差は、 -0.5 で、1年生グループと全く同じ差が開いた。1年生グループと同様、下位2グループの平均点の方が上位2グループより高かった。上位、下位で最も差が開いたのは、これも1年生グループと同様、「英語を読む際に、効果的に読むために気をつけるのは、それぞれの単語の意味を理解すること」(-0.61)であった。

第3因子の二グループの差は、 0.2 と1年生グループ(0.4)の半分で、5つの因子のうちで最も上位・下位間の差が小さかった。最も差が開いた項目は、「自分の知っている人物の中で、英語を最も上手に読む人は、文章中の情報と自分がすでに知っていることとを統合することに優れている」(0.67)である。

第4因子の差は、 -0.4 で、第2因子同様、下位2グループの平均点が上位2グループより高かった。上位、下位で最も差が開いたのは、「英語を読む際に、読解を難しくする原因は、個々の単語の発音」(-0.78)であった。

第5因子の差は -0.3 で、最も差が開いたのは、「英語を読む際に、読解を難しくする原因は文章の構成」(0.58)であった。

4. 考察

本研究は、外国語として英語を学ぶ学生の、読解ストラテジーに関する認識と読解能力との関係を明らかにすることを目的とした。調査の結果、両者には以下のような関係がみられることが判明した。

Ⅱ. 全体的(トップダウン)ストラテジーに対する認識と読解能力

外国語として英語を学ぶ学生は、1年生グループ、2年生グループともに、読解において全体的ストラテジーに対する認識と読解能力に正比例的な関係が見られた。全体的ストラテジーの認識に関する3つの因子のうち、全体的ストラテジー使用に関して肯定的な認識を示す第1因子は、1年生2年生グループとも上位・下位グループで大き

な差が認められた。この結果から、より優れた読み手は、自分の使用する全体的ストラテジーに対する認識がより高いことがうかがえる。調査の結果から、学生の全体的ストラテジーに対する認識が、より高い読解力を生み出す結果になった原因はいくつか考えられる。まず、全体的ストラテジーを認識している学生は、英語を読む際に主要部分とそれを支える詳細部分との違いを認識できる。その結果、文章の全体的な構造とおおまかな意味を把握することができると考えられる。次に、全体的ストラテジーを認識する学生は、新しい語彙や語句に出会うと、前後関係から単語の意味を推測することができると回答した。また彼等は、文章の内容を理解するために自分が既に知っている知識や経験を活かすこともできると回答した。

一方、他者の全体的ストラテジー使用に対する肯定的な認識を示す第3因子は、1年生2年生グループにおいて、5つの因子の中で最高の得点を示し(上位1:4.2, 下位1:3.8, 上位2:4.2, 下位2:4.0)、また上位・下位グループで差がそれほど開かなかった。これは、上位・下位グループとも英語を効果的に読む際に、全体的ストラテジーを使用した方がいいと認めているからであろう。ただ、他者の持つ全体的ストラテジー使用の効果は認めているにもかかわらず、下位グループは自分では全体的ストラテジーを使用できなかった。

全体的ストラテジー使用に対する否定的な認識を示す第5因子については、英語の読解を難しくする原因を尋ねる項目を含んでいるが、1年生、2年生グループで違った傾向が見られた。1年生グループでは、上位グループの平均点が下位グループよりわずかに高かった(上位1:3.6, 下位1:3.4)が、2年生グループでは、下位グループの方が上位グループより高かった(上位2:3.3, 下位2:3.6)。これは、読解の難しさに対する、優れた読み手と未熟な読み手の見方には、さほど差が無いことを示していよう。

Ⅲ. 局所的(ボトムアップ)ストラテジーに対する認識と読解能力

学生の局所的ストラテジーに対する認識と読解

能力には、反比例的な傾向が見られた。1年生、2年生グループにおいて、局所的ストラテジー使用に対して肯定的認識を示す第2因子は、5つの因子の中で上位グループ、下位グループの差が2番目に大きかった。さらに、下位グループの平均点が上位グループのそれを上回り（上位1：3.2、下位1：3.7、上位2：3.3、下位2：3.8）、上位・下位グループの差はともに0.5であった。これは、下位グループの方が、読解において局所的ストラテジーに陥る傾向にあることを示している。調査の結果から、学生の局所的ストラテジーに対する認識のために、読解能力が劣る結果になった原因はいくつか考えられる。まず、局所的ストラテジーに陥る学生は、各々の単語の意味を理解することばかりに気をとられ、文章の全体的な意味を理解できない傾向にあった。次に、彼等は個々の単語を読むのが難しく、そのため文章の構造に注意が払えないばかりか、文章の内容を理解するのに自分が既に持っている知識や経験を活かせないと回答した。第2因子に対する得点がどのグループでも高かったのは、下位グループだけではなく上位グループも、局所的ストラテジーが英語を読む際に効果的だと考えていることを示していよう。結局、学生は全体的および局所的ストラテジーの両方が、英語を効果的に読むには必要だということを示したことになる。

局所的ストラテジー使用に対する否定的認識を示す第4因子の平均点は、1年生2年生両グループで他の4つの因子より低かった。第2因子同様、下位グループの得点が上位グループを上回った（上位1：2.6、下位1：2.9、上位2：2.5、下位2：2.9）。上位・下位グループの差は、1年生グループで0.3、2年生グループで0.4であった。第4因子の項目のうち3つは、読解を難しくしている要因（「単語の発音、個々の単語の音、アルファベット」が回答）を尋ね、1つは効果的に読むために気をつけること（「それぞれの単語全体の発音が完全にできること」が回答）を尋ねた。おそらく、この因子に対する得点が低かった原因は、学生が音読ではなく黙読について尋ねられたからだと思われる。第4因子に対する上位1グループ

と下位1グループの差が最も開いたのが、アルファベットであったことは、1年生の下位グループは、読解においてアルファベットに問題があることを示唆している。

順應 1年生と2年生の読解ストラテジーに関する認識の差異

調査の結果、1年生と2年生で読解ストラテジーに関する認識に際立った差異は認められなかった。むしろ、共通する点が多かった。唯一注目すべきは、2年生下位グループの第1因子の平均点が、全グループの平均点中一番低く（1.5）、1年生上位グループの得点の半分にも満たなかったことである。この結果から、他の3グループに比べ2年生下位グループは全体的ストラテジーが読解に有効だということを他のグループほど認識していないことがわかる。1年生下位グループ（2.5）よりはるかに得点が低いのは、2年生下位グループがより全体的ストラテジーに注意を払っていない可能性が高い。

1年生2年生の唯一の違いは、第5因子に関して、1年生は上位グループの得点が下位グループより高かったのに対し、2年生は下位グループが上位グループより高かったことである。第5因子に関しては、1年生2年生ともに上位下位グループで際立った差はない。これは、どちらのグループも全体的ストラテジーが英語の読解に有効であると認めていることを示唆していよう。Barnett（1988）が指摘するように、学習者の言語スキルとストラテジーの進歩は遅く、一年で格段の進歩を期待できないのは当然である。

5. 結論

外国語として英語を学ぶ学生の、読解ストラテジーに関する認識と読解能力との関係に関して本研究でわかった事は、以下の通りである。

- 1) 外国語としての英語の読解において、学生の全体的（トップダウン）ストラテジーに対する認識は、読解能力と正比例的な傾向が見られた。つまり、より読解能力に優れた学生は、より全体的（トップダウン）ストラテジーを認識する

傾向にあった。

- 2) 外国語としての英語の読解において、学生の局所的（ボトムアップ）ストラテジーに対する認識は、読解能力と反比例的傾向が見られた。すなわち、読解能力の未熟な学生は、より局所的（ボトムアップ）ストラテジーを認識する傾向にあった。
- 3) 1年生と2年生で、読解ストラテジーに対する認識に大きな違いは見られなかった。むしろ、両学年に共通する傾向があった。

上位グループ下位グループともに、全体的ストラテジーが効果的読解に有効だと認識していたことは、注目に値しよう。一方、上位グループ下位グループとも、特に語彙を扱う際に局所的（ボトムアップ）ストラテジーに頼る傾向にあった。従って、第二言語あるいは外国語としての英語の読解を効果的にするためには、学生が全体的ストラテジーと局所的ストラテジー両タイプのストラテジーをバランスよく使用できるような指導を、日々の授業に取り入れていく必要がある。さらに、学生に、両タイプのストラテジーの使用について指導するだけでなく、何故これらのストラテジーが読解に有効で、またいつストラテジーを使用すべきかも指導していく必要がある。

最後に、本研究の調査にご協力頂いた本学1年生および2年生の学生に対して謝意を表します。

参考文献

- Barnett, A.M.: Reading through Context: How Real and Perceived Strategy Use Affects L2 Comprehension. *The Modern Language Journal*, 72, pp. 150-162, 1988.
- Carrell, L.P.: Metacognitive Awareness and Second Language Reading. *The Modern Language Journal*, 73, pp. 121-134, 1989
- Carrell, L.P.: The Effects of Rhetorical Organization on ESL Readers. *TESOL QUARTERLY*, 18-3, pp.441-469, 1984.
- Carrell and Eisterhold, J.: Schema Theory and Reading Pedagogy. In Carrell, P., Devine, J. and Eskey, E. (Ed.) *Interactive Approaches to Second Language Reading*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988, pp. 73-92.
- Cohen, D.A.: *Strategies in Learning and Using a Second Language*. New York: Addison Wesley Longman, 1998.
- Ikeda, M., & Takeuchi, O.: Tasks and Strategy Use: Empirical Implications for Questionnaire Studies. *Jacet Bulletin*, 31, pp. 21-32. 2000.
- Kitao, S.K.: *Reading, Schema Theory and Second Language Learners*. Tokyo: Eichosha Shinsha, 1989.
- 清川英男：『英語教育研究入門-データに基づく研究の進め方』, 大修館, 1990.
- Ono, N., Midorikawa, H. and Robson, G.: Exploring the Nature of Good and Poor L2 Reading Behavior. *Jacet Bulletin*, 33, pp. 73-88, 2001.
- 竹内 理：『認知的アプローチによる外国語教育』, 松柏社, 2000.
- 田鍋 薫：『英文読解のプロセスの指導 談話の結束性と読解』, 溪水社, 2000.
- 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ：『学習者中心の英語読解指導』, 大修館, 1992.

資料1：質問紙

次の空欄には当てはまる答えを書き、また、()内では当てはまる方に 印をつけて下さい。

記入日 2001年 月 日
 大学名 学年 年 学籍番号
 氏名 年齢 歳 (男・女)

1) 日本語と英語以外の言語を読むことができますか。 (はい・いいえ)

2) 1)で「はい」と答えた人は、どの言語を読むことができますか。

言語名

3) 授業で指定された教材のほかに、教室外で英語で書かれたものを定期的に読んでいますか。

(はい・いいえ)

4) 3)で「はい」と答えた人は次のうち当てはまるものに 印をつけてください。

新聞 雑誌 小説 その他(具体的に)

5) 英語を勉強している年数

日本で 年 外国で 年 (国名)

6) 外国に滞在したことがありますか。 (ある・ない)

7) 6)で「ある」と答えた人は、どこの国に、どれくらいの期間滞在したことがありますか。

国名 期間

次の記述は、英語を読む(黙読)ことについてのあなたの気持ちを尋ねるものです。例にならって、それぞれの記述に対して賛成か反対か、自分の気持ちに最もよく当てはまる番号に 印をつけて下さい。あまり深く考えずに、感じたまま答えて下さい。全部で36問あります。記入ものないように注意して、一つ一つの問い全部に答えて下さい。

記入例	全く 賛成	どちらとも 言えない	全く 反対
コンピュータは私の生活にはなくてはならないものだ。	1	3	4 5

<u>それでは、ここから始めて下さい。</u>	全く 賛成	どちらとも 言えない	全く 反対
-------------------------	----------	---------------	----------

英語を読む際に、

1) 文章中次に何が来るかを予測できる	1	2	3	4	5
2) 主要部分とそれを支える詳細部分との違いを認識できる。	1	2	3	4	5
3) 文章中にすでに存在する情報と次に来る情報とを関係づけられる。	1	2	3	4	5
4) 著者の言っていることの重要性や真実性を問うことができる。	1	2	3	4	5

- 5) 読んでいる文章の内容を理解するために、既知の知識や経験を利用できる。 1 2 3 4 5
- 6) ある事柄が理解できているかいないかをきちんと認識できる。 1 2 3 4 5

英語を読む際に、何かわからないことがある場合には、

- 7) 読み続けて、先に行けば解明されるだろうと期待する。 1 2 3 4 5
- 8) 問題のある箇所を読み返す。 1 2 3 4 5
- 9) 問題のある箇所の前に戻って、そこからもう一度読み返す。 1 2 3 4 5
- 10) 知らない単語を辞書で調べる。 1 2 3 4 5
- 11) 諦めて、読むのを止める。 1 2 3 4 5

英語を読む際に、効果的に読むために気をつける事柄は、

- 12) 単語の一部を心の中で発音すること。 1 2 3 4 5
- 13) それぞれの単語の意味を理解すること。 1 2 3 4 5
- 14) 文章全体の意味をつかむこと。 1 2 3 4 5
- 15) それぞれの単語全体の発音が完全にできること。 1 2 3 4 5
- 16) 文法的構造(文の主語、目的語がどれであるか、あるいは文型など) 1 2 3 4 5
- 17) その話題について自分がすでに知っていることに文章をむすびつけること。 1 2 3 4 5
- 18) 単語を辞書で引くこと。 1 2 3 4 5
- 19) 内容の詳細部分。 1 2 3 4 5
- 20) 文章の構成。 1 2 3 4 5

英語を読む際に、読解を難しくする原因は、

- 21) 個々の単語の音。 1 2 3 4 5
- 22) 単語の発音。 1 2 3 4 5
- 23) 単語を認識すること。 1 2 3 4 5
- 24) 文法的構造。 1 2 3 4 5
- 25) アルファベット。 1 2 3 4 5
- 26) その話題について自分がすでに知っていることに文章を結びつけること。 1 2 3 4 5
- 27) 文章全体の意味をつかむこと。 1 2 3 4 5

28) 文章の構成。 自分の知っている人物の中で、英語を最も上手に読む人物は。	1	2	3	4	5
29) 単語の認識能力に優れている。	1	2	3	4	5
30) 単語の発音に優れている。	1	2	3	4	5
31) 文章全体の意味をつかむことに 優れている。	1	2	3	4	5
32) 辞書を使うことに優れている。	1	2	3	4	5
33) 単語の意味を推測することに 優れている。	1	2	3	4	5
34) 文章中の情報と自分がすでに 知っていることとを統合することに 優れている。	1	2	3	4	5
35) 内容の詳細部分に焦点を当てる ことに優れている。	1	2	3	4	5
36) 文章の構成を把握することに 優れている。	1	2	3	4	5

資料2：第1グループの読解テストからの抜粋

THE STORY OF LEVI STRAUSS

In 1847, when he was 18 years old, Levi Strauss crossed the ocean to join his brothers in New York City. He was the last brother to leave Bavaria, Germany. Levi quickly learned English, and began peddling his brothers' dry goods around the city. Soon he was in California where he was supposed to sell the goods to miners there, but he had sold everything during his travels cross-country. In fact, all that remained was one long roll of canvas. The California miners asked Levi for durable, comfortable pants. He took the canvas to a tailor, who stitched together a pair of overalls according to his specifications. The overalls were a great success.

A few years later, Strauss decided to make more of his pants using denim and to dye them an indigo color. Because his new pants were so successful, he soon added shirts, jackets and other clothing to the line. His handiwork won him fame across the country.

1. Where did Levi Strauss come from?
 - (a) New York City
 - (b) California
 - (c) Bavaria
 - (d) the countryside

2. What did Levi do with this brothers' dry goods?
 - (a) He sold them while traveling.
 - (b) He gave them to the miners.
 - (c) He was the last to use them.
 - (d) He peddled them to a tailor.

3. How did Levi change his jeans?
 - (a) He started using canvas.
 - (b) He didn't use indigo.
 - (c) He used dyed denim.
 - (d) He changed their color to black.

4. Levi was so successful that he
 - (a) gave up being a miner.
 - (b) took lessons from a tailor.
 - (c) added other types of clothing.
 - (d) learned English.

5. In the context of the passage, the word roll means (a) toss (b) cake (c) list (d) piece.

資料3 : 第2グループの読解テストからの抜粋

THE CHANNEL TUNNEL

On May 6, 1994, the Channel Tunnel, a railway tunnel which connects Britain and France, was officially opened. The tunnel runs under the English Channel, an arm of the Atlantic Ocean separating the island of Britain from mainland Europe. The tunnel, which took more than seven years to complete, is now considered one of the great building achievements of the 20th century. Paris is now only three hours away from London by train.

The idea of building a tunnel between England and France was first suggested as long ago as 1802. In fact, during the 19th and 20th centuries, there have been many attempts to build such a tunnel. Until recently, however, they had all been unsuccessful. The main reason for this was British fears that a tunnel could be used to start an attack on Britain. Between 1882 and 1950, the British Parliament refused permission ten times to build a tunnel. Britain is an island, and this has helped keep the country safe from its enemies. In fact, Britain has not been invaded since 1066. The sea and the strong British navy have kept enemies away.

It was not until the 1960s that permission to build a tunnel was given. Actually, simply building a tunnel never presented such a danger to Britain. The threat was more psychological than physical. British people liked the feeling of being an island, surrounded by the sea. Even today, many British people would like Britain to remain as independent of Europe as possible. Most people, however, accept that Britain needs to be a part of Europe, both for economic reasons and to maintain its influence in the world. Just as the majority of Britain's goods are now sold to Europe, so Europeans have become Britain's partners rather than its enemies. In this sense, the tunnel can be said to be a symbol of Britain's new identity as part of the European Community.

1. The Channel Tunnel

- (a) started being built in 1994.
- (b) was built in the 19th century.
- (c) is only three hours from London by train.
- (d) passes under the sea between Britain and France.

2. Why did it take so long before a tunnel was built?

- (a) Britain is an island with a strong navy.
- (b) The British feared an attack from Europe.
- (c) France invaded Britain in the 20th century.
- (d) Nobody suggested the idea until the 20th century.

3. Why did British people feel that the tunnel was a threat?

- (a) Britain didn't want to be independent of Europe.
- (b) Permission to build it was not given until the 1960s.
- (c) They felt protected by the sea around them.
- (d) Attempts to build a tunnel had been unsuccessful.

4. Britain has come to see the Europeans as partner because
- (a) Europeans have stopped helping Britain's enemies.
 - (b) Europe has become very important economically to Britain.
 - (c) a tunnel under the sea is still a big threat to Britain.
 - (d) many people want Britain to remain an independent country.
5. Which of the following statements true?
- (a) Some British people are not so happy about joining Europe.
 - (b) The Channel Tunnel has made Europe seem further away to the British.
 - (c) There was no desire to build a tunnel under the English Channel until recently.
 - (d) The British Parliament gave permission to build a tunnel in the 19th century.